

鴻 koh

月刊俳句誌

令和2年12月1日発行

(毎月1回1日発行)

第15巻第12号 通巻174号

12_{月号}
2020



秋は夕暮れ存問の風の音

どんぐりの袴ばかりが贅の上

下り鮎一瀉千里の川となる

山に耳ありかりがねに道のあり

芋水車ごとりと昼を深めけり

赤とんぼ精霊とんぼ日の暮るる

たうたうたらし

主宰作品

増成栗人

莫塵畳むことに始まる冬仕度

栗食うべ手持無沙汰となる夕べ

干瓢を夜干しの里に鹿の恋

ばつたんこ寢息のやうな風の来て

一夕の色となりたる酔芙蓉

山の日のたうたうたらし添水鳴る

源義の忌なり蓑虫揺れづめに

詩 作品抄

曝涼の琵琶に螺鈿の駱駝かな
 蜻蛉と吹かれてゐたり汀女の忌
 十五夜の月ふつつと湯が滾る
 かなかなは小さな森の子守唄
 すれ違ふ無言の会釈刈田道
 賜りし和綴ちのノート秋の声
 新涼の水に放ちて紫蘇茗荷
 稲光闇の帳を引き裂きて
 水澄めり鳴立庵に庵主の碑
 かなかなの鳴く一木が暮れ残る
 林 未生
 水沢和世
 倉林はるこ
 水谷はや子
 針谷忠郎
 美濃律子
 山内宏子
 佐藤慧美子
 鈴木 崇
 守屋久江

増成栗人 選

マンドリンの音が涼夜の音となる
 つくつくぼふし終章に入る物語
 ムツクリを奏でるやうに虫時雨
 露草や内緒話のやうな風
 穴まどひ野辺に夕べの来つつあり
 昼は昼夜は夜の音のぼつたんこ
 日記帳に手漉きの栞藤村忌
 ウィスキーグラスの音も良夜かな
 鰯雲空のキャンパス埋め尽くす
 木洩れ日を浴び一叢の曼珠沙草
 大沼経子
 立石まどか
 井上つぐみ
 北村 操
 藤原明美
 山崎正子
 佐藤あさ子
 花本智美
 鈴木容子
 中内敏夫

作品抄選評

増成栗人

曝涼の琵琶に螺鈿の駱駝かな

林 未生

東大寺正倉院に保管されている天平時代の天皇遺愛品が、毎年秋に奈良国立博物館で曝涼を兼ねて公開されている。曝涼とは寺社の虫干しの用語。作者もこの曝涼展示を見に奈良へと足を運んだのであろう。そこに飾られているさまざまな宝物の中で、一際目立つ琵琶に足を止める。古色豊かな琵琶の胴に螺旋で埋め込まれている駱駝のおぼろげな姿。ふと往古へと思いを遡行する作者の心象がさらりと詠われていて読み手の胸に届く作品である。林未生さんは机上の想念で句を作ることはしない。暇を作っては歩き、対象と心を通わせるのである。掲句も静謐な博物館の展示室で、旧きメルヘンを描くような螺鈿の駱駝に、吐息のような呟きを覚える作者の心象があたたく語られている。

蜻蛉と吹かれてゐたり汀女の忌

水沢和世

中村汀女忌は九月二十日。「ホトトギス」にあつて、台所俳句に新たな領域を開いた俳人である。滑らかな調べで愛唱性のある作品を数多く作られている。「風花」主宰として、星野立子、橋本多佳子、三橋鷹女と

並び四Tと称せられた。この忌日を多く使う一人に水沢和世さんがいる。若き頃、汀女門であつたことに起因している。掲句も穏かな一日、漂うように翔ぶ蜻蛉に機微を托し、一緒に吹かれいるような思いに到る過程が、やわらかな調べで汀女への思いを辿るように詠われている。和世さんは決して突飛な発想で物言ったりはしない。自らのリズム感を崩さず、暮らしを詠い続けるのである。この詩情を更に深めて欲しいと願っている。

十五夜の月ふつふつと湯が滾る

倉林はるこ

美しきほどの満月が中天にかかる。厨には湯がふつふつと沸いていると言う。何のための湯なのか、良夜といかに関わるのか、作者はこれを一切言おうとしない。あとは読み手の領域。ここが実に潔くて達成感がある。俳句は言葉で物と言う文芸ではない。暮らしや対象の描写を通して、己が感動を伝達する文芸なのだ。作者はいま、この美しき月を仰ぎ「無」の世界へと心を遊ばせる。ふと現実に戻るように湯の滾る音が厨から届く。その小さな空間に作者・倉林はるこさんのロマンが充満する。まさに一篇の詩である。作者

は暮らしのロマンを十七音に見詰め続ける。十五夜の月がそんな作者をすっぽりと包み込んでゆく。

かなかなは小さな森の子守唄

水谷はや子

この句も作者の憧憬が生み出したロマン。さほど遠くではない小さな森。その中を通りゆく作者に姦しきほどのかなかなの聲が降る。近付くとぱつと消え、通り越すとまた激しき声となる。その声を自らの幼き日に立ち戻るように「森の子守唄」だと呟く。己が子育てのときへの回顧なのかもしれぬ。どちらにしてもこの把握に、水谷はや子さんの詩の原点を見る思いがしている。暮らしを写生的にきちんと詠う作者だが、その胸底にあるやわらかなボエム。その一端がこの一句に表出されている。「かなかなは森の子守唄」だけでは美しいが思い付きだけに留まってしまふ。ここで使われた「小さな」の一語が、見事に作者を己がロマンへと導いてゆくのだ。

すれ違ふ無言の会釈刈田道

針谷忠郎

刈り終る田の道をゆく作者。穏かな一日の景が静かに十七音に打ち出されている。近くの農夫なのであろうか。すれ違ふときに交わす無言の挨拶が、逆にいきいきとした親しみを籠めて伝わってくる。私の若い頃

の作品に「冬田ゆく誰に挨拶するでなく」の句があるが、同じような心境だと考えている。針谷忠郎氏は熊本県から千葉県へと転居して来たそう。まだそう多くの知己もないのかもしれない。しかしこの心境には土地への親しみが見え、土地に馴染みゆく寧ろぎが見えてくる。農作の一年の大きな仕事を終えた刈田の明るさ。その中をゆく逍遙の作者像が、かつて映画で見た笠智衆のやさしさの面影を偲ぶように私には届いてくる。

賜りし和綴ちのノート秋の声

美濃律子

かつては静かだが、熱心にそして活発に句を作り、編集部の一員として貢献してくれた美濃律子さん。いま病を得ての長い療養生活に入っている。それでも「下総句会」の日には、投句の自作を携え、句会前の短い時間、会場へと足を運んでくれる。句会には参加出来ぬとしてもその笑顔に会えるだけで嬉しい。掲句、誰かから詩を書くにふさわしい和綴じのノートを貰ったと言う。ぱらぱらと捲るまだ白紙のノート。その中から送り主の声が聞こえ、己が呟きが聞こえる。「秋の声」と言いながら、決して寂しさの声ではない。燦々と輝く澄んだ秋の声音なのだ。この和綴じのノートに、やがて美濃律子の十七音が溢れる。そんな明るき夢を描く作者のはにかんだような笑顔が偲ばれる一句である。

「鴻」の歳時記（冬編）

抽出 佐久間敏高

冬 鯉の水ゆるゆる冬となりにけり 半谷洋子

冬 ドレミファの声に分教場の冬 石垣真理子

冬 ゆつくりとゆくりと墨を磨りて冬 伊藤 隆

立 冬 上毛三山黝ずみて冬立ちにけり ありかわみのる

小 晦 日 ペン皿にペンもどしたる小つごもり 鈴木 崇

寒 の 内 寒 満月ひときは闇の濃かりけり 横井 遥

寒 の 内 大 寒 や 鯉 の 気 配 の 水 輪 生 る 石田容子

短 日 手になじむ万年筆よ日の短か 佐藤あさ子

凍 る 凍る夜やにぶく照らさる蔵の街 田中資凡

春 近 し リハビリの水中歩 行 春 隣 深川峰子

冬 日 少年工のいたはる傷に冬日濃し 吉田鴻司

冬 日 和 冬麗のちりめんじやこの目鼻かな 後藤兼志

冬 の 月 幻の酒とピアノと冬の月 北城美佐

初 時 雨 初時雨水子地藏の百の貌 駒井ちえ子

雪 催 昏睡の母の福耳雪もよひ 花本智美

初 雪 初雪の夜は静かに墨を磨る 山田ゆきこ

雪 拭へども茂吉の歌碑に雪が降る 伊藤啓泉

枯 野 大枯野なり月光を膝の上 増成栗人

寒 の 水 校了の眼を洗ふ寒の水 谷口摩耶

勤労感謝の日 スリッパを換ふる勤労感謝の日 後藤久美子

襟 巻 豹柄のマフラーを巻き古希が過ぐ 岩佐 梢

雑 炊 河豚雑炊啜り齡を深めけり 赤峰ひろし

神の留守 神の留守鯉が人影恋うて寄る 荒川心星

神の留守 神留守の空へ梯子が掛けてある 山崎正子

一 茶 忌 一茶忌の枯れに近づく草紅葉 松田那羅生

一 葉 忌 くしやくしやの紙幣を伸ばし一葉忌 内藤泰子

久 女 忌 久女忌の探梅に山歩きたる 中村世都

寒 雀 ふくよかにあり神領の冬雀 待場陶火

冬 桜 絵馬堂へ日のまはりくる冬桜 森多 歩

冬木の桜 武州蔵町冬木桜の影淡く 豊田みどり

山茶花 この風と決めて散りたる姫椿 倉林はるこ

山茶花 訃報また一つ山茶花散ることも 西條弘子

枯葉 枯葉降る降るクラークの胸像に 蘭さと子

落葉 落葉して手の平ほどの辻祠 北原沙織

千両 千両の実のくれなゐに鳥のこゑ 山田世都子

枯菊 枯菊を焚き暮れどきの空のいろ 幡 柏

枯蓮 蓮 磔刑のごとく蓮の枯れにけり 高木直哉

枯蓮 蓮枯れて季節を一つ弔ひぬ 中島源兆

白菜 マリアのやうに白菜を横抱きに 野村昌代

枯草 枯草を啄む鳥のいとほしき 上杉 馨

枯芝 母と座す枯芝にある日のぬくみ 守屋久江

冬 萌 冬 萌えや大樹の洞に羽の音 伊藤 寛

去年今年 亡き妻の部屋を灯して去年今年 小澤 冗

去年今年 人形の和紙の色艶去年今年 渡辺とくゑ

初日 かいつぶり初日は山を離れけり 原 達郎

御降り 御下りや対岸の塔ともるころ 平野鏐哉

淑気 活けられし花に淑気の宿りゐる 伊藤真代

若水 若水を汲むオリオンが中天に 森 睡花

御慶 見慣れたる山に御慶を申しけり 瀬地タカ

粥 柱 粥 柱 ことこと恙なき暮らし 水谷はや子



<http://www.haisi.com/koh/index.htm>



羽音集

増成栗人 選



いちにちに色を添へたる葉鶏頭
草の絮思ひのままに過ぐす日々
虫しぐれ狭庭の闇を濃くしたり
穴まどひ野辺に夕べの来つつあり
秋桜みどり児に齒の生まれけり
稲光闇の帳を引き裂きて
曼珠沙華約束の日はとうに過ぎ
秋の月創作ノートめくる音
どしや降りの雨の後から秋がくる
敬老日東京駅に泊まりをり
新涼やつれづれに読む文庫本
小糠雨庭木戸脇の螢草
すれ違ふ無言の会釈刈田道
病身に追ひ打ち掛くる残暑かな
栃の木につくつく法師墓を訪ふ
野の花の色なき風の中になかな
凜として秋明菊の花の白
秋の風メタセコイアの散歩道
検診の予約をとりて秋扇
鰯雲空のキャンパス埋め尽くす

豊橋 鈴木容子

松戸 針谷忠郎

さいたま 佐藤慧美子

船橋 藤原明美